

「まさか病院まで、ついて行けないけど、途中までごいつしよできるかな、と思つて……」

「ありがとう。ほんまにいつしよに行つてくれるんやなあ」

見舞うきつかけが掴めなくて、宮川は迷つていたようだった。

「指切りげんまん、してもいいわよ」

宮川と話していると、里子はつい遊び心がわいてくる。

「じゃ、嘘ついたらデート千回してもらおうかな」

明るい里子につられて、宮川も以前のような気安さに戻っていた。

「いいわよ」

した淳一のところへフェリーでよく行ったものだ。この日は、久しぶりの乗船だったので、懐かしそうに船内を見回していた。

二等船室の前のフロアーまで来たとき、絨毯を敷き詰めた階段の上に特二船室と書いたドアが見えた。里子はそのドアを見るたびに思い出すことがあった。

淳一と結婚して一年が経つた頃、気難しかったトミエと言いつ争つて、里子は妊娠七カ月の体で婚家を飛び出し、牟礼の実家に戻つた。その直後、会社から入港案内の速達が届いたが、淳一からは、お腹の子が心配なので今回は会いに来なく

「ほんと、じゃ、嘘ついてくれるほうがいいかな。だつてデート千回もできるんだつたら」

宮川は急に気分が楽になったようだ。

「もう……」

彼と知り合つて半年にもならないのに、気の合う幼馴染か同級生のような親しきで話せる。

三

にちようび あさ さとこ みやがわ まつしまこう
日曜日の朝、里子と宮川は松島港からフェリーで神戸へ向かつていた。瀬戸大橋が開通して乗船客がめつきり減つたらしいが、この日も客は疎らだった。里子は若い頃、神戸港へ帰港

ていい、と言つてきた。しかし里子は、どうしても淳一に会いたかった。会つて、これからのことを相談したかった。

ななかげつ はい、 りゅうざん しんはい
七カ月に入つたら流産の心配は薄らぐが、早産の危険はあるので、里子はフェリーで行くことにした。以前から一度乗つてみたかった特二船室の切符を奮発した。絨毯が敷き詰められた階段を上がつて行き、ドアを開けたら小さな部屋に、七、八人いた。

(なあんだ、二等船室をコンパクトにしただけか……)

里子は期待したぶん、がっかりしながら、靴を下駄箱に並べていた。

(出産までもう訪船できないから、一人で行くのはこれが最後かな……)

前へせり出しはじめたお腹を庇うように顔を上げたとき、突然声をかけられた。振り向くと、ボーイさんが立っていた。

「あ、う、妊娠何カ月ですか？」

「七カ月に入っただけです」

お腹のことを聞かれたあとは、たいてい「おめでどうございませす」という言葉が返ってくるので、里子は悪びれることなく応えた。

「すみません。七カ月に入った妊婦さんの乗船は御断りしているのですが……」

予想もしなかった彼の言葉に、里子の体は

一瞬間まって、途方にくれた。

(ここまで来て下船させられるなんて……。船内での早産を防ぐための規則だろうけれど、何とかならないものかな……)

「ちよつと、待ってて」

立ち往生の里子を見て気の毒になったのか、ボーイさんは急にいなくなつた。

彼を待っている間、先に乗船している客がチラツと里子の方を見ては視線をそらす。ボーイさんが戻って来るまでの間、里子のはらはらしながら待っていた。戻って来た彼から、今回だけは乗船を許可します、という返事ももらったときは、どつと力が抜けた。

そんな過去の出来事を思い浮かべながら、里子が階段を見上げていたら、お茶を買いに行っていたみやがわもど宮川が戻って来た。二人はテーブルのある二等船室の窓際に座り、里子が冷蔵庫の残り物で作った爆弾おにぎりと漬物で、朝食をとった。

「残り物ばかり詰め込んだおにぎりでごめんなさいね」

「いやあ、朝早くから大変でしたね。このおにぎり、何がでてくるのか楽しいし、ほんと美味しいですよ」

こう言いながら宮川は、大きなおにぎりを二個食べてくれた。

「ああよかったあ。残ったらどうしようかな、なんて思ってたから」

「ところで、さつき、二階の方を覗いていたけど、特二の方がよかった？」

「いいえ、そんな、ここがいいです」

里子は、ちよつと躊躇したあとで、妊娠七カ月のときのことを宮川に話すと、

「船員さんの奥さんだつて聞いてはいたけど、そんなことがあつたのですか……」

彼はそう言つて、感慨深げに窓の外を見ていた。

「そうよ。陸の人みたいに、妊娠、出産、子育てを夫婦で見守ることが出来る人がどれほど羨ましかつたかしれないわ。宮川さんの奥さんもき

つと、そうだと思っから、お子さんのこと、もう責めないであげて……」

里子は言ってしまっから、せっかくの小旅行のはじまりに、相応しくない話題を振ってしまったかな、と反省した。それと同時に、だいぶ前から宮川が自分のことを船員妻だと知って、黙っていてくれたことに感謝したい気持ちだっった。

「わたしも頭ではわかってるつもりだけど……。妻がいなくなっからには、心の狭い自分を責めて、しばらく悩んだりもしたけど、急に生きることがむなしくなっって、禅寺へこもったり、八十八カ所巡りの遍路に行ったりしました。沢山

出港から一時間半が経ち、宮川は話し疲れたのか、今度はコーヒーを買いに立っった。里子も化粧室へ行き、口紅を少し明るめのピンクにしてきたら宮川にじっと見詰められ、どきまぎした。

「わたしの顔に何かついてます？」

仕方なく、こんな冗談ごかしで宮川の視線から逃れようとした。

「いや。ふいに夜汽車の中で会っったときのあなたの横顔を思い出して……」

「前にも宮川さん、そんなこと言ってましたけど、ほんとに出会って不思議ね。今度は二人で船に乗っっているんだから……」

撮っった息子の写真はとおかた焼いてしまったので、位牌を懐に入れて歩きました……」

里子は、宮川の告白を聞きながら、(あなたも苦しんだかもしれないけれど、奥さんはもつと辛い思いをしたと思っうわ)

こう胸の内を呟いていた。

「遍路では、いろんな悩みを抱えている人たちに会っただけれど……。ある年老いた女性の言葉は、今でも忘れられません。どんな苦境にいても、今を受け入れる。生きるっってそういうことなんじゃないかっって。その女性は、九回目の遍路で、あと一回お参りしたら戦死した夫のところへ、いつ行っっても本望だと、笑っていました」

海域が広がり、行き交う船も多くなっったように感じながら、里子は海原を見ていた。再び宮川が語りはじめる。

「遍路から帰っった当座は、妻のところへ行っって話し合おう。話し合いたっって思ってたけど、行けなかつた……。あなたの助言がなかつたら、まだ、勇気がでないままでしたかもしれない」

「息子さんの思い出を共有できるのは、奥さん以外にいないと思っうわ。夫婦でしっかり惚んであげないと可愛そうよ」

里子はそう言っただとすぐに、自分が経験したこともないことに対して、偉そうなコメントをし過ぎたかな、と気恥かしい思いにかられた。そ

れに對して、

「ありがと……」

彼は小さく頷いた。

それからしばらく黙り込んでいた宮川が、いつも自分が乗船している船ではないけれど、乗組員は顔見知りの者もいるので操舵室でも案内しようか、と里子を誘った。しかし里子は遠慮した。周りの人に気を遣わせたり、二人の中を勘ぐられたりするのが嫌だった。今回のことで、彼と奥さんの仲がうまくいくようになったときのことを考えれば、できるだけそういうことが噂にならないように気をつけておかなければ、と思う。「知り合いの連中に、あの美人の連れは誰かつ

て、さつき聞かれたけん、恋人だつて言つてやつ

たら、羨ましがられちゃつた」

宮川の笑いが怪しい。

「ほんとう？」

「嘘でした。弟の嫁さんが親類の結婚式に一人で来ていたので、大阪まで送つて行くところにしました」

「宮川さんの弟さんつて、大阪にいるの？」

「弟は、どこだったっけ、広島かな」

「よくもそんなでたらめ並べて……」

言いながら、里子は可笑しさをこらえた。

「さあ、これで正々堂々と行動できます。どこへなりとも、お供しますよ」

こんな冗談を言い合いながら、二人は船尾のデ

ツキへでた。誰もいなかった。三月末の潮風は少

しひんやりしている。里子は白いコートの下に

宮川からプレゼントされたスカーフをしていた

が、風に持つて行かれそうになって慌てて結び直した。

二人は急に気まづくなつたように押し黙つて、

ラムネの泡のように続く白い航跡を眺めていた。

（彼は、今どんな顔をしているのだろう……）

急に息苦しさを感じた里子が振り向こうとした

ときだった。突然、宮川に手を握られた。胸の鼓

動が激しくなる。

（いい年なんだから冷静でいよう。いなければ……）

……

里子が、そう自分に言い聞かせていると、

「そろそろ六甲山が見えてくる頃や、表へ回ろう」

彼は里子の手を握つたままで、アップパーデツキへの階段を上つて行く。三百六十度見渡せるデツキの正面に六甲山が近づいてくる。二人は並んで手摺に持たれ、微風に吹かれていた。

「ああ、あの夜行列車がそのまま今のこのフェリ

ーまで続いていたら……」

里子の手を離れた宮川の声は、押さえている感情を今にも解き放ちたい、そんなふうに聞こえる。二人の前に広がる春の海の明るさが煩わし

くさえ感かんじられる。

「ほんと、あの夜よるの雪ゆききれいだったわね……」

里子さとこは小聲ここえで応こたえる。まだ残のこっている彼かれの掌てのひら

のぬくもりに、現実げんじつを忘わすれそうになっていると、

「二人ふたりきりで、誰だれも知らないどこか遠とおくへ行いけた

らしいな……」

穏おだやかな灘なだの海うみに誘さそわれるように宮川みやがわが言いっ

た。

(以上7月29日放送分)